

方位と選地の謎

会員 大河内 俊光

世界に類がないわが国の巨大古墳
古代の都城・神社・寺院が、なぜそ
の位置に選定され、建設されたのか、
さらに熊野本宮大社が、なぜ紀州の
山深い、かの地に造営されたのか、
いまだ、だれからも答えは出されて
いない。

これに対し私は、これらを築造し、
造営した「選地の原則」とでも言え
る古代から近世まで共通の法則を、
ふとしたきっかけで見つけたのであ
る。

ある日、職場で道路地図をトレ
ースするため、地図に三角定規をあて
がい作図していた折である。大阪府
堺市大仙町にある世界最大級の規模
をもつ仁徳陵古墳と、約1キロ

南南西にある履中陵古墳の主軸が、
ともに同じ角度、北北東30度より
南南西30度に傾いていることに気
がついたのである。

これには何か訳があるにちがいな
いと思ひ、念のため地図の子午線を
正確に引き、仁徳陵後円部（頂上標
高44m）を基点として30度ごと

に線を引くと、南南東30度の延長
上に、陶器山（153m）の三角点
があつたのである。さらに、履中陵
古墳の項上部より南南東30度の線
上に、高倉台（95m）宝積院があ
る。まことに不思議な一致である。
近くにいた従業員に、これはどうい
うことだろうと話したが、「偶然そ
うなつただけですよ」と一笑に付さ
れてしまった。

しかし、少年時代より河内・和泉
に居住し、『古事記』『日本書紀』
（以後『記』『紀』とする）の中に
出てくる史跡に囲まれ、古跡めぐり
をライフワークとしていた私にはひ
らめくものがあつた。これはきつと
何か理由があるにちがいないと、確
信に似た思ひにつき動かされた。暇
を見つけ、調べるため、まず国土地
理院発行の5万分の1の地形図を張
り合わせ、大阪府下・奈良県下を検
討したが、細部について不明な点が出
てきた。今度は2万5000分の
1の地形図を45枚（縦9枚、横5
枚）張り合わせ、大阪・奈良・京都
の大部分を網羅し、特注の三角定規
で本格的に精査することにした。

これが端緒となり、紀州熊野三山
成立の根拠、地図上に記載のない熊
野大社本宮の旧社地の正確な位置を
探索した。わけても、那智山青岸渡
寺を札所第一番とする西国巡礼三十
三所観音めぐりの札所寺院が、どの
ような理由で選定されたかという根
拠の手がかりを、実地踏査によつて
つかんだのである。先輩諸兄方には
いささか理解しがたいところがある
のは承知で述べてみることにする。

1. 南南東（北北西）30度の 発見

現在の社会においても、墓相・地
相等の方位は、日常生活上無視でき
ない問題である。では一体、恵方と
か鬼門とかを重視するようになった
のはいつの時代からであろう。この
ことに興味を持ったのは、友人より
「八門遁甲秘法・方位学」の小冊子
をもらったからである。

同書の中から、地相の原則、墓相
の原則の一部分を抜粋してみよう。

地相については、

1. 乾（北西）に小高き山や丘があり、巽（東南）に池・畠など広々と連ったものは、遠方より福徳を招き、古事吉祥、年々財貨を増す。
2. 北に大山あり、南に遠き山あり、東に流水、西に砂地など連る家は、福徳円満にして栄達あり。
3. 南高く北低く、東高く西低く、南方に常盤木の森に包まれ、北方の開けた家は凶相。

墓相については、次のようである。

1. 墓地は、東南または南に向けるが吉。
2. 山では、墓地は、東方に向かうが吉。

3. 墓の後方の高いのは、子孫繁栄の吉相。
4. 宅地の西又は西北にある墓は大

吉。

5. 東北又は南西にある墓は凶相。

『続日本紀』和銅元年（708）2月の平城遷都の詔には、
「方今平城の地、四禽凶に叶い、三山鎮を作し、龜筮並びに従う、宜しく都邑を建つべし」とある。四禽とは、東に青龍が泳ぐ川があり、南に

朱雀が遊ぶ平野、西に白虎が潜む丘陵、北に玄武の住む山があるという「四神相応図」のことである。

当然、墓相・地相の原則は、平城宮の地が四神相応、風水思想に基づいて決められたと同じ原則のものと判断出来るであろう。

『記』『紀』の時代の人々も、陵墓・神社・寺院を造るについて、風水思想に基づき恵方（吉方）を選んだものにも間違いはないと思つたのである。

では、「三山鎮を作し」とはどういうことであろうか。これは、墓相の説明にあるように、都城を築造することに際しても、東南を意識していたものと考えられはしないか。特製の地図で調べるにつれ、次に述べる事実がわかった。ここに主だった十数例を取り上げてみることにする。「三山鎮を作し」については改め次節で述べる。

まず、古墳であるが、大阪湾より東へ、大阪平野から奈良盆地へ順に述べてみることにする（図1）。初めに、和泉市の黄金塚古墳（前方後円墳）の後円部頂上より、南南東3

0度の方角に岩涌山（898m、河内長野市）①がある。この古墳は「景初三年陳是作銘銘之保子宜孫」の銘

文のある銅鏡が出土したことで有名である。景初3年は魂の年号で西歴239年にあたり、『魏志』倭人伝によれば、この年に邪馬台国の女王であつた卑弥呼が魏の明帝から「親魏倭王」の称号や銅鏡100面を与えられた年であり、問題のある鏡である。築造は古墳時代前期とされている。次に、履中陵古墳と高倉台宝積院②、仁徳陵古墳と陶器山③が続く。南河内郡美原町の黒姫山古墳より同じ方角に、下赤阪城跡（175m、千早赤阪村）④がある。この古墳は、衝角付・眉庇付と呼ばれる甲冑が計24領も出土し、甲冑の出土数においては、他の古墳に例をみない重要な古墳である。

大阪市天王寺区茶臼山古墳からは、同方角に、松原市の大塚山陵墓参考地の後円部頂上を通り、大阪府と奈良県にまたがる金剛山⑤の三角点（1112m）に至る。大塚山古墳は巨大な前方後円墳で、墳丘長は343m、仁徳陵・応神陵・履中陵・

造山古墳に次いで第5位の大きさで、雄略陵に比定されている。

金剛山の東隣にそびえるのは、役小角が修行したと伝えられる葛城山（960m）⑥である。ここを調査して大変重要なことを発見した。葛城山の三角点より北北西30度の方角に線を引いてみると、線上に藤井寺市の津堂城山古墳の後円部中心点がある。この古墳は、南河内の古市古墳群の最北端に位置し、4世紀末から5世紀初めに築造されたとみられる二重堀のある天皇陵級の墳墓である。この直線をさらに延長すると、難波宮の大極殿中心点、さらに天満の天神さんで知られる天満宮の中心部、その先は豊崎神社のかつての神域を結ぶことができる。豊崎神社は、孝徳天皇が大化改新を行った難波長柄豊碓宮の宮跡に比定する説がある。ぐらいの由緒ある神社である。

この発見で、古墳より見て南南東30度の方角にある山の頂上を信仰の対象、「磐座（イワクラ）」としていたのは墳墓だけだと認識していたのを、全面的に改め、都城・神社なども含めて調べるべきだとの結論

に達した。

古市古墳群の中で有名なのは応神陵古墳であろう。この古墳から南南東30度の方向を探すと、聖徳太子陵のある五字ヶ峰⑦を通り、葛城山内の平岩城跡(221m)に至る。

また、清寧陵古墳より弘川寺⑧に至る。この弘川寺は天智天皇4年(665)役行者(小角)が法華経二十八品を配して金剛・葛城の連山に28カ所の霊場を開いた寺院の一つである。

あるいは仲津媛陵古墳より磐船神社⑨に至る。『旧事紀』天孫本紀によると、「にぎはやの命十種のみたからを奉じ、天磐船に乗りて、河内国河上の、哮峰に天降り給う」とある。境内には豊富な伝説をもつ天磐船・浪石など奇岩怪石が多く、神社の後ろ、山全体が御神体となっている。寺院には葛城神道の根本道場の高貴寺がある。

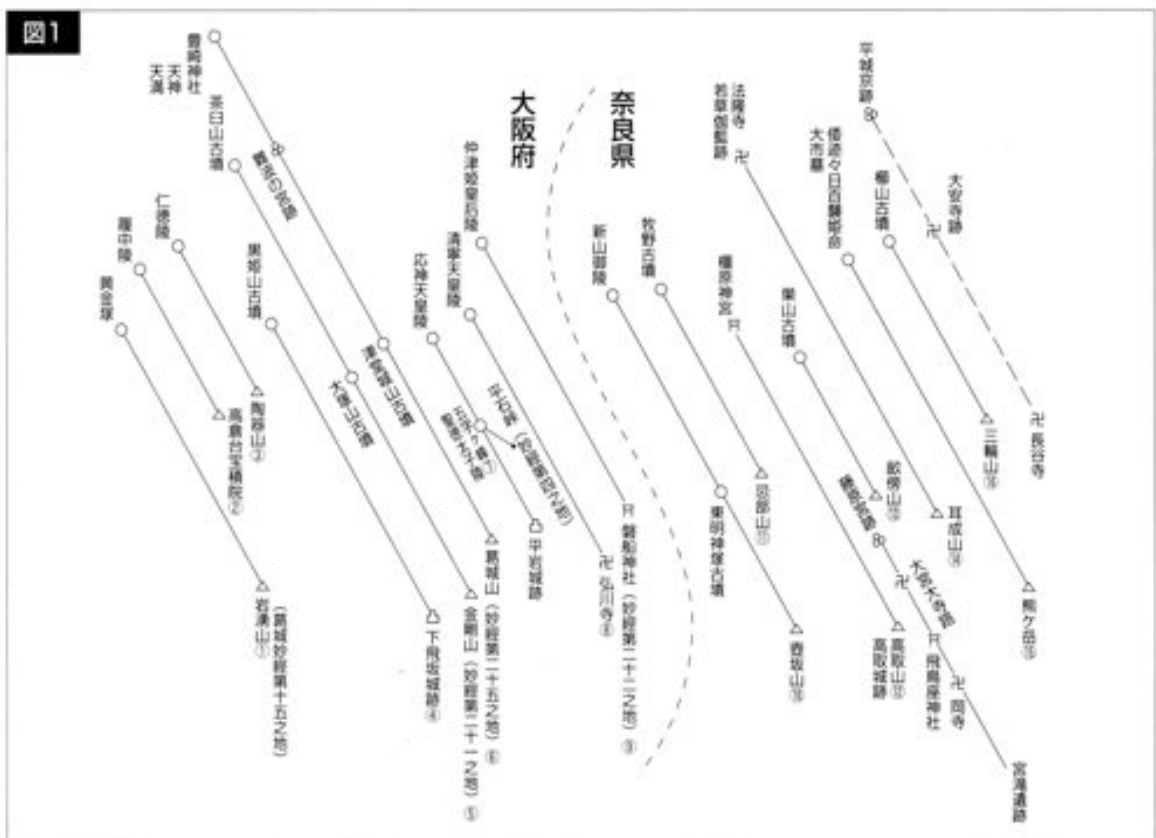
次に、奈良盆地に移る。『壺坂寺靈驗記』で有名な壺坂山(422m、奈良県高取町)⑩より北北西30度

町)がある。忌部山(108m、橿原市光陽町)⑪より牧野古墳(同郡広陵町)は、同じく前記古墳と平行線上にある。

続いて、高取山(583m、高市郡高取町)⑫より橿原神宮(橿原市畝傍)に至る。この神社の祭神は神武天皇で社地は『紀』に、神武天皇が即位するとき「かの畝傍山の東南の橿原の地は、けだし国のもなかのくしらか。みやこつくるべし」とのたまったところに比定したとのことである。

畝傍山(199m、橿原市畝傍)⑬より柴山古墳(全長204m、北葛城郡広陵町)に至る。5世紀前期の代表的古墳とされている。耳成山(139m、天理市木原町)⑭からは、法隆寺若草伽藍跡に達す。

次に、奈良盆地東方の山々に移る。熊ヶ岳(904m、桜井市)⑮より倭迹々日百襲姫命大市墓(桜井市箸中)に至る。この古墳は箸墓古墳と呼ばれる、三輪山の西北に位置する十数基の古墳のうち、最も規模の大きな前方後円墳(全長272m)である。倭迹々日百襲姫命の墓を大市に



つくるべきのことを、『紀』崇神天皇10年の条には、「ここに倭々々姫命仰ぎ見て、悔いてつきう、則ち箸に陰を撞きて薨りましぬ。すなはち大市に葬りまつる。故、時人、其の墓を名づけて、箸墓という。この墓は、日は人作り、夜は神作る、故、大坂山の石を運びて造。則ち山より墓に至るまでに、人民相踵ぎて、手ごしにして運ぶ」とあり、こうした墳墓の築造に際して神が協力したということは、その古墳をより以上に神聖な陵と認めていたのであろう。そして、三輪山(467m、桜井市)⑯より橿山古墳がある。これらはいずれも山の頂上より北北西30度の方角にある。

次に、宮跡について見てみよう。奈良盆地には古代の宮跡が幾つか発見されているが、前述の難波宮にしても、はじめ、その位置ははっきりしたことはわからなかった。大阪城地域にあると言われていたが、1953年より本格的な発掘調査が始められ、1968年の第31次調査まで15年の歳月をかけ、大極殿跡が確認されたのである。難波宮大極殿

の中心部より南南東30度の方角に葛城山の三角点がある。そうなら、藤原宮、平城宮の大極殿中心部より、南南東30度の方角にはどんな山があるのかと考え、線を引いた。ところが、両方ともにそれらしい山に行き当たらないのである。しかし、よく見ると、驚くべきことをまたまた発見した。

奈良盆地南部に位置する藤原宮跡の場合、大和三山に囲まれた地に宮まれ、持統・文武・元明天皇の3代16年にわたって、わが国初の中国式都城制を採用した都である。現在、大宮土壇と呼ばれている場所を、1935年、日本古文化研究所が発掘調査し、藤原宮解明の端緒となった。

この大極殿跡より南南東30度の方角に直線を引くと、この線上に、大宮大寺跡・飛鳥座神社・岡寺、その先に吉野町宮滝の宮滝遺跡へと続いたのである。この地が1930年より発掘され、「宮滝式」と呼ばれる縄文後期に属する土器や弥生式土器さらに飛鳥・奈良時代に続く建築遺構が検出されたところである。『紀』には、斉明天皇の2年(656)「吉

野に宮を作る」とある。天武天皇は8年(679)、皇后、草壁・大津・高市・河嶋・忍壁・芝基の各皇子と扶翼の事を誓わせられた。続いて皇后が天皇に立ち(持統天皇)、三十余回の行幸を重ねられ、文武・天正・聖武天皇もそれぞれ行幸されたが、この地が、天平8年(736)まで、天武朝から聖武朝の60年近く殷盛を極めたと比定されていた離宮遺跡である。

偶然の発見が、事実の積み重ねで蓋然性を高め、点(吉野宮遺跡)から北北西30度の方角の点(藤原宮)を結びつけることによって、どうやらその必然性を帰納的に証明出来るのではないか。

それでは藤原宮より和銅年間に元明天皇が遷都した平城宮はどうだろうか。延暦13年(794)に平安宮に遷された後、平城宮も荒廃して、旧皇居も田園と化し、以後昭和29年(1954)に平城宮発掘調査会が組織され、現在徐々にではあるが、かつての国家の威信をかけた都が人々の眼前に現れつつある。この土地で、字を大黒芝と呼ばれてい

た場所が、その後の調査によって、第2次の内裏跡と指定されるようになった。現在までに大極殿をはじめとする大内裏の各建物や、それに付随する多くの遺跡や遺物が発掘されている。

さて、この平城宮の大極殿跡より南南東30度の線上には、何があるのだろうかと何度も調べた結果、大安寺旧域内を通り長谷寺(奈良県桜井市初瀬町)に続くこと確信した。なぜならば、この寺院は、天武天皇の命により、大和弘福寺僧道明上人が三重の塔と石室仏像を造り、長谷寺を建立したのである。千仏多宝塔銅盤一面が現存し、その銘文により、天武天皇の朱鳥元年(686)道明上人によって造立されたことが証明され、その後、聖武天皇の神亀4年(727)に天皇の勅願により、徳道上人によって十一面観音が安置せられ、堂宇を建立したのである。

これまでに述べてきた事例は、ことごとく天然自然(山であり巨岩であり滝)のものであったのであるが、平城宮では人工の造営物が出てきたので、文献類をもう一度詳しく調べ

ることにより、次のようなことが判明した。

『大和名所図会』巻4の豊山神楽院長谷寺の項に、「天平末年五月十八日開眼供養あり。導師は行基菩薩、咒願は義邏大徳なり。霊像石座は天平元年八月十五日の夜瑞応あり。忽然として金剛宝磐石土をうけてあらはるゝ事、方八尺にして、足跡の穴あり。尊像の御足にえりあはせしが如し。さてこそ十一面の像をすえ奉りしなり」。

十二面観世音菩薩像は巨石を台座としていたのである。長谷は泊瀬とも書き、この谷あいに堆略天皇・武烈天皇の時代に皇居があったとも言われ、この谷には、縄の張られた巨石の磐座が数多く見受けられる。

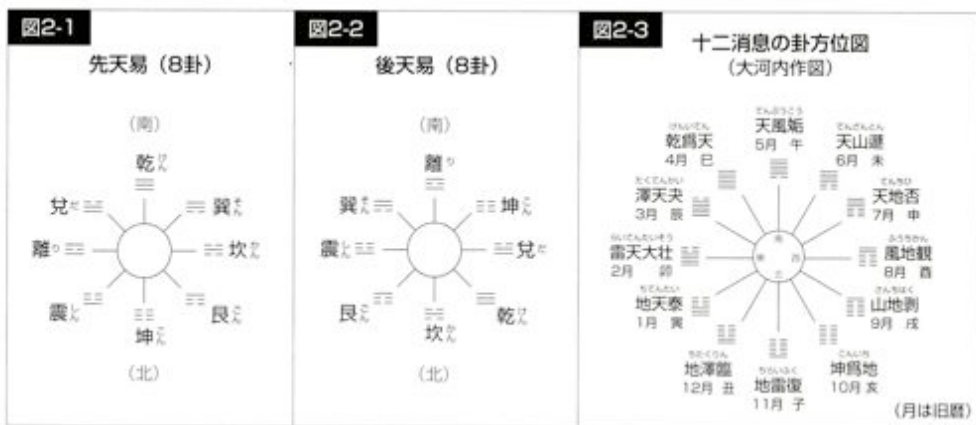
※
ではなぜ、このように山・滝・巨石を磐座として北北西30度の方向を重視したのであるのか。

2. 易経が記す乾と巽

さて、この子午線より南南東・北北西を結ぶ線は、何を意味するのか。子を北、午を南と定めた十二支方位は、南南東が巳であり、北北西が亥の方位となる。また、古代の人々が現代の測量技術に優るとも劣らない測量が出来たのはどうしてだろうか。

地上において、基準とした方向に対して、ある方向がどう向くかを示す方位として、東洋では古来、五行による「中央(土・黄)と、四方の東(木・青)・南(火・赤)・西(金・白)・北(水・黒)」の方位と、八卦方位による「北(坤)・北東(震)・東(離)・南東(兌)・南(乾)・南西(巽)・西(坎)・北西(艮)」(先天易、図2-1)と、「北(坎)・北東(艮)・東(震)・南東(巽)・南(離)・南西(坤)・西(兌)・北西(乾)」(後天易、図2-2)、
「子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥」の十二支を30度ごとに区分した十二方位(図2-3)と、五行(十干)の一部を加えた二

十四方位などがある。



中国の古伝説の三皇「伏羲・神農・女媧(黄帝)」のうち、伏羲が易の作者と伝承され、その八卦が「先天易」で、明るい南を「天」||乾、暗い北を「地」||坤としたとされている。これに対して、周の文王が始め、子の周公旦が完成させたと言われているのが、「乾」||天を西北、「坤」||地を西南に置いた「後天易」である。「易に太極あり。是れ兩儀を生ず。兩儀は四象を生じ、四象は八卦を生ず」と、易の根本理念は古来このように言われてきた。

太極とは、陽と陰が分かれる前の混沌とした大宇宙のことである。やがて宇宙は陽と陰との二面に分かれ、兩儀となり、この奇数一の陽と偶数一である陰に形成され、この兩儀もそれぞれ陽と陰の二面をもち、陽は老陽・小陰に、陰は老陰・小陽に分かれて四象となる。さらにこの四象も陽と陰にそれぞれ分かれ、八卦としたのである。この八つは天・沢・火・雷・風・水・山・地という森羅万象の八要素に当てはめられ、自然の原理のすべてを象徴したものである。この八つ「天||乾、沢||兌、火

離、雷震、風巽、水坎、山艮、地坤」が八卦方位とされている。

この八卦より以上に森羅万象を精密に表そうとして、八卦にさらに八卦を組み合せ、三画の卦「☳☳」をこつ重ねて六画の卦「☰☷」とし、八卦の二乗で64とおりの卦を作り、個々に意味をもたせた「大成の卦」が生まれたのである。

普通、漢代の易学は「漢易」と称され、呪術的筮法として知られているが、余りにも難解すぎて、残念ながら説明することは不可能である。しかし、その中で十二消息の卦というものがある。それは六十四卦のうち12の卦の形を陰と陽とが互いに下から浸食する順序に従ったもので、それぞれが1月から12月まで、1カ月間変化しながら支配されている。図2・3のように、六十四卦のうち特にこの十二卦を君の卦(天皇の卦)として尊重し、他の五十二卦は雑卦とし、臣に当たると考えられた。この漢易は、前漢も末期になって、正統的ではない易学として発生したものだ。当時において正統的でない

と批評されたという事実は、大変重要である。前漢で正統的でない批評されたということは、民間信仰を対象にしたものと考えられる。

この十二消息の卦を方位に当てはめてみた場合、6画とも陽の卦になる方角が南南東30度の巳の方角になり、「乾为天」の卦となる。北北西30度の亥の方角は、6画とも陰の卦「坤为地」となる。

では、『易経』が記した「乾为天」の解説を見てみよう。「偉大なる乾の創造力、その力を受けて万物が始まる。乾は天道を統御する根元である。雲は大空に流れ、雨は大地を潤す。この天の力を受けて、万物はさまざまな形をあらわして天地の間をうめつくす」とある。次に、「坤为地」を見る。「完全なる坤の生成力。その力を受けて万物が生まれる。大地は厚くして万物を乗せ、その徳は天の広大さと一致する。坤の限らない包容力によって、万物はことごとく伸び栄える」とある。

天地を模範として作られた「乾」「坤」が、天地に代わって万物を生

成し「天を統べる」という。南南東より北北西の線上にかけて、古墳・都城・神社・寺院を築造した重大な意味は、ここにあるとみられる。

十二支には鼠・牛・虎・兔・龍・蛇等の12の動物が配されているが、十二支の12文字の示す象意は、十干と大体同じく植物の輪廻である。すなわち、

子 卒るで、新しい生命が種子の内部から萌し始める状態。

丑 紐で、からむこと。牙が種子の内部でまだ伸びえぬ状態。

寅 蟻くで、草木の発生する状態。

卯 茂るで、草木が地面を蔽う状態。

辰 振うで、陽気動き、雷がきらめき、振動し草木が伸長する状態。

巳 巳で、万物が繁盛の極になった状態。

午 坤うで、万物にはじめて衰微の傾向が起こり始めたさま、

未 味わうで、万物が成熟して渋みを生じるさま。

申 坤くで、万物が成熟して締めつけられ、固まってゆく状態。

酉 縮むで、万物が成熟に達し、

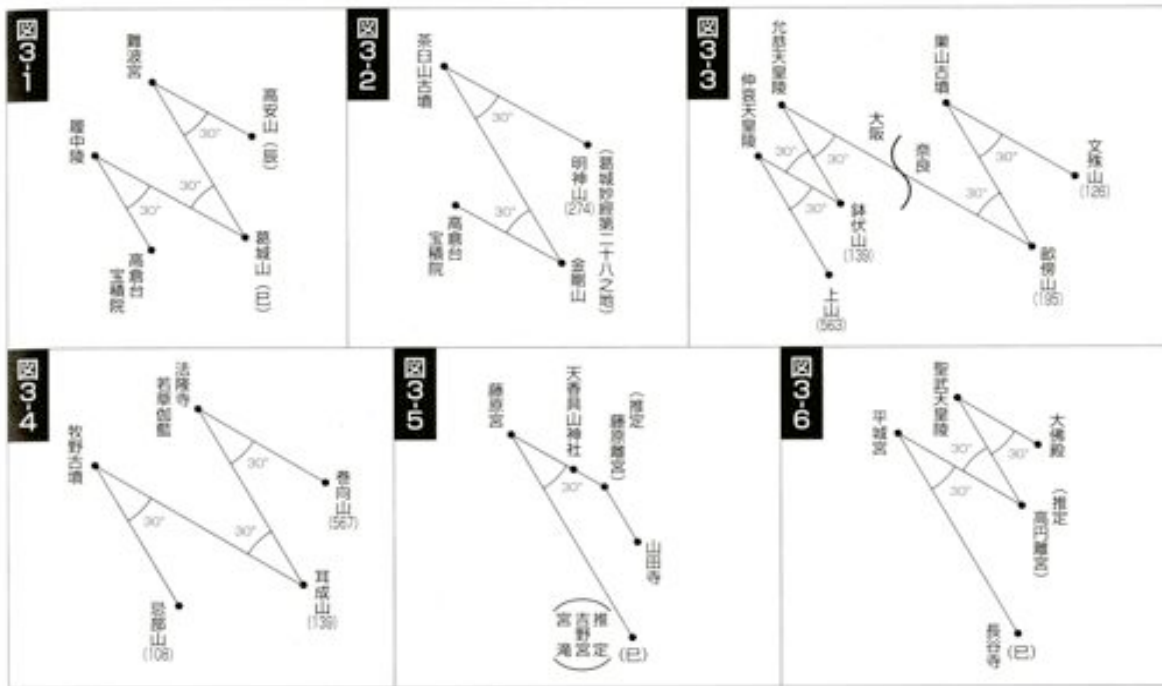
むしろちぢむ状態。

戌 滅ぶ、または切ることで、万物が減びゆく状態。

亥 関るで、万物の生命力が凋落し、すでに種子の内部に生命が内蔵。

これを農作業にあてはめればどうだろう。寒い冬を越した種が春から夏にかけて播かれ「巳」乾「天」陽「男」となり、夏から秋にかけて成熟し、秋も終りに収穫「亥」坤「地」陰「女」となる。また、動物を配されているのにも、それなりに意味があるようである。「辰」と「巳」は陽であり男性の象徴である。「戌」と「亥」は、「犬の腹帯」や多収穫を願う「猪の子祭」に示されるように、陰である女性の象徴と考える。

ここで、前述の地相に着目してみよう。乾(戌亥「北西」と巽(辰巳「東南」)が恵方とある。葛城山々頂を「巳」の方角とし、「亥」の方角にある難波宮大極殿の位置は線上の何を基準にして決めたのであろう。恵方が辰



巳であればと
 考え、前記大極
 殿跡より辰の方
 角（東南東）に
 線を引いてみた。
 そこには高安山
 の三角点（48
 0 m、大阪府八
 尾市）があった。
 『紀』に天智6
 年（667）「高
 安城を築く」と
 ある。これで、
 高安山々頂を
 「辰」、葛城山々
 頂を「巳」とし、
 「辰」から「戌」
 の方角の線上と、
 「巳」から「亥」
 の方角の線上の
 交点に難波宮大
 極殿が造営され
 たことが判明し
 た（図3・1）。

1982年5月、
 『万葉集』や『新

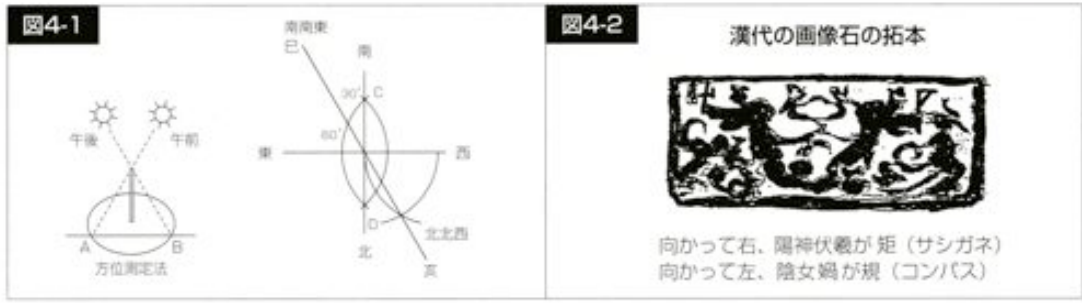
古今和歌集』にうたわれながら正確
 な位置がわからなかった聖武天皇の
 高田離宮（推定）の遺構が、奈良市
 白毫寺高田町の高校建設予定地で見
 つかった。平城宮と同じ瓦が使われ
 ているほか、石組みの庭園遺構も出
 てきたのである。この建設予定地の
 すぐ東側の高台が、平城宮大極殿よ
 り「辰」の方角に当たる（図3・6）。
 また、1991年2月、藤原宮大極
 殿跡より「辰」の方角に、藤原離宮
 と思われる遺構が発掘された（図3
 ・5）。

「三山鎮を作す」の意味は、「辰」
 から「戌」、「巳」から「亥」の方
 角の交点に陵墓・都城を造り、この
 場所より、現在でも尊ばれている異
 辰（辰巳）の二方向にある磐座を恵方
 とし、この3カ所のことを言ったも
 のと明言できる。

古来、河内・大和地方の旧家では、
 異の方角に入口を設け、乾の方角に
 倉を建てる方式を「たつみ門に、い
 ぬい倉」と言い、大吉相としたもの
 である。

では、どのようにして天空の子午
 線を正確に測量し、360度を12

等分できたのであろうか。近世まで、
 土木業界では、東西南北を、子午線
 に基づいて次の方法で測量したので
 ある（図4・1）。まず水平な地面
 に垂直に棒を立てる、棒の足を中心
 に円を描く、朝に太陽が昇ってくる
 と、はじめ長かった棒の影が次第に
 短くなり、影の先端がちょうど円
 周上に落ちた点をAとする。やがて
 太陽は正午に南中し、影は最も短か
 くなり、それから次第に長くなって、
 影の先端が再び円周上の点Bに落ち
 る。このAとBを結んだものが、天
 空上の正東西となり、線上のA点と
 B点よりコンパスで半円を作り、そ
 の交点C・Dを結んだ線上が、正南
 北、すなわち子午線となるのである。
 天地創造神とされ、また、易の作
 者とされている伏羲が矩を持ち、女
 姻が規を持っている漢代の画像石
 （図4・2）が、数多く見られる。
 現在、建築工事で使用されている矩
 の原形がこの時代からあり、このよ
 うな測量方法が近世まで続いている
 ことを付記しておこう。



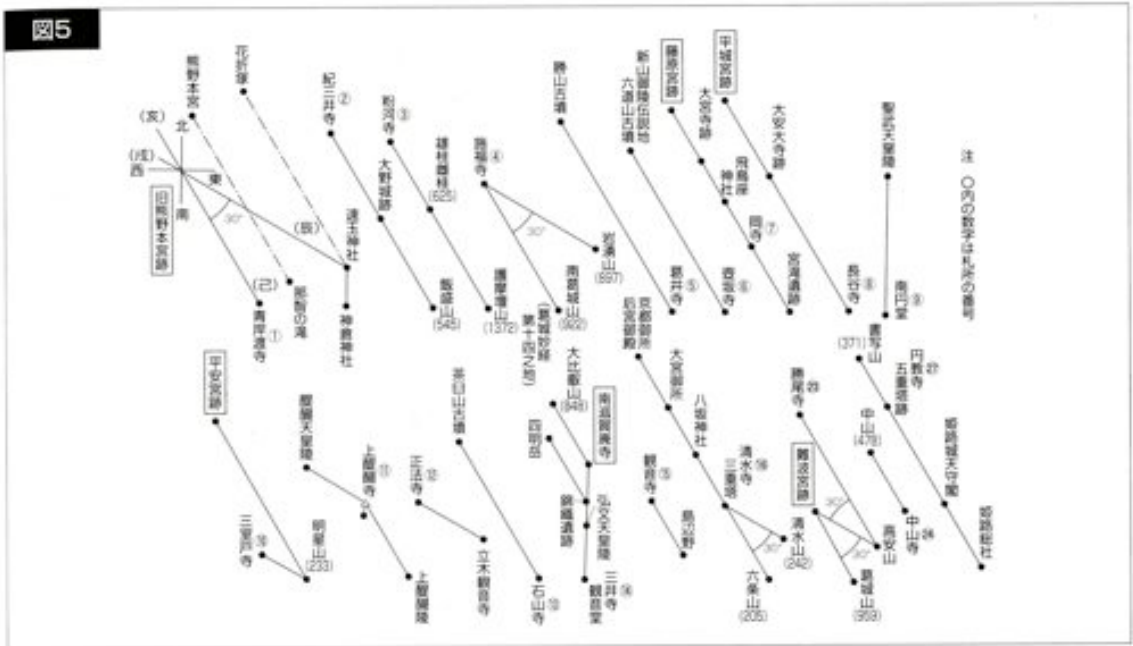
3. 西国三十三所観音と辰巳のえにし

西国の巡礼は、大和長谷寺の徳道上人によって養老2年(718)に始められ、270年後の永延2年(988)に花山法皇が再興し、それより今日に及ぶ、と伝えられている。山岳修験者、天台・真言の高僧の間には、諸地方に散在する修行の場所を求めて遍歴する人たちが多く、花山法皇もその一人であったろう。しかし、法皇の時代(10世紀)には、観音霊場としての三十三所寺院はまだ確定していなかったようである。天台座主であった行尊(956・1135)が巡礼したところの記録を見ると、長谷寺・岡寺・南法華寺と続き、大和・和歌山・熊野・河内・丹後・美濃・近江・京都・奈良を経て、宇治三室戸寺で終わる順序になっている。行尊の記録の後に三井寺覚忠が応保元年(1161)に、那智から始めて、紀三井寺・粉河寺を経て

飛鳥地方、長谷寺に行き、奈良を通って、河内・摂津・播磨・丹後・近江・美濃・京都を回り、三室戸寺で終わったと記されている。その順序は違っているが、現在の札所寺院名がそのままある。また、いずれの寺院から始めるにしても、いずれも三室戸寺院が最後になっている。西国巡礼が一般的に行われるようになったのは13世紀以降であるが、その成立には伝説的な物語がさまざまに入り組んでいる。その真偽はともかくとして、第一札所那智山青岸渡寺より調査することにした。まず、青岸渡寺より亥の方角に線を引いてみると、地図の上で本宮という地名の所に当たったが、熊野大社からは外れてしまう(図5)。那智大滝より亥の方角には熊野大社がある。もう一度、那智三山の資料を読んでみると、「明治二十二年の大洪水で、上中下、各四社の内、上四社を除いて災害にあい、熊野傘妻郡音無里(本宮町本町)より明治二十四年三月に現地に遷しまつり、従来の地を別社地と称した」とある。速玉大社から亥の方角には吉野の奥

駆けで知られる花折塚があるが、戌の方角に線を引くと、本宮町で青岸渡寺から亥の方角の線と交叉した。現地へ行き確認した結果、この交点に石祠2殿が造営されていたのである。熊野川と音無川にはさまれた中州の一角にある旧社地より辰の方角に速玉大社があり、巳の方角に青岸渡寺がある。後白河上皇が熊野へ参った回数、本宮34回、新宮・那智は15回に及ぶ。はるばる相当な日数を費やし、道中では多くの危険がともないながらも、かくも篤い信仰を集めたのは、熊野大社は異の方角に速玉と那智をあて、最高の大吉相地であったためと断言出来る。この熊野三山の地は、いずれも人工物であり、正確に30度角をもって設営されたものである。決してこれらの事例は、金剛山や葛城山を山立てにしたときにできる線ではないのである。では、次にこの西国三十三所寺院の設営根拠を实地見聞を踏まえ順に述べよう。

図5



◇ 第二番 紀三

井寺（和歌山 市紀井寺町）
寺伝によると、

宝亀元年（770）に中国からの渡来僧為光上人が建立したが初めてであるというが、上人がこの地に來住した時には、すでに千手觀音がまつられていたと言う。巳の方角に大野城跡があり、飯盛山（545m）に至る。

◇ 第三番 粉河寺

（和歌山県那賀郡 粉河町）
縁起によると、

この寺も宝亀元年（770）にさかのぼると伝えられている。巳の方角に雄桂雌桂という

山（625m）があるが、その先に護摩壇山（1372m）がある。

◇ 第四番 施福寺

（大阪府和泉市槇尾山町）
寺伝によると、欽明天皇（540

・571）の時代に行浦上人が建立し、弥勒菩薩を本尊としたという、その後、弘法大師が仏門に入ることを決心し剃髪を行ったとされている。巳に岩涌山（897m）、辰に南葛城山（922m）がある。南葛城には葛城二十八宿の葛城第十四番経塚があり、岩涌山には十五番経塚がある。

◇ 第五番 葛井寺

（大阪府藤井寺市藤井寺）
この寺は、神亀2年（725）に

本尊千手觀音像を造立し、憎行基によつて開眼供養を修せられたと伝えられている。

巳の方角は上山としかわからず、亥の方角に御勝山古墳（大阪生野区）がある。大坂夏の陣に徳川秀忠が陣をかまえた前方後円墳である。
◇ 第六番 壺阪寺（奈良県高取町）
元興寺の僧弁基が、大安元年（7

01）にこの寺の山頂で修行中に秘蔵の水晶の壺中に觀世音菩薩を感得したという。亥の方角には新山御陵伝説地の六道山古墳がある。

◇ 第七番 岡寺

（奈良県高市郡明日香村字岡）
天智天皇2年（662）に岡本宮の旧跡を義淵僧正がもらつて建立したという。前述のとおり、巳の方角に宮滝（吉野宮推定地）があり、亥の方角には飛鳥座神社・大宮大寺・藤原宮跡へと続く。

◇ 第八番 長谷寺

（奈良県桜井市初瀬町）
中世に伊勢信仰が盛んになると、

この寺の本尊が天照大神の本地と考えられるなど、その信仰は盛大を極めた。前述のごとく、平城宮大極殿より巳の方角に当たる。

◇ 第九番 南円堂

（奈良県登大路町）
南円堂は奈良の都にある唯一の札所寺院で、興福寺の伽藍の西南隅に位置する八角円堂である。なぜ興福寺の多数の伽藍の中からこの南円堂が選ばれたか。それは、この堂の真北に聖武天皇陵があるからだろう。

◇第十番三室戸寺（京都府宇治市三室戸）

寺伝によると、本尊の千手観世菩薩は、宝龜年間（770・780）

光仁天皇がこの尊像を信仰され御室を下賜、その後この寺が光仁・花山・白河天皇の離宮になったので、三室戸寺と改称されたという。この寺より辰の方角に明星山（233m）、

この山より亥の方角に平安宮の大極殿がある。古来巡礼の最終地がこの寺院になっているのは、平安京を意識していたためであろう。正式名称は「明星山三室戸寺」という。

◇第十一番上醍醐寺（京都市伏見区醍醐山町）

醍醐山（454m）の正南に准胝観音像がある。醍醐天皇は皇子誕生をこの像に祈り、その効験で朱雀・村上天皇が誕生されたと伝えられている。南方に水晶谷が広がる台地となっている。醍醐山の巳の方角に上醍醐陵があり、戌の方角に醍醐天皇陵がある。

◇第十二番正法寺（大津市石山津石

山内畑町）

この寺は、養老6年（722）に元正天皇の御願により泰澄が建立したと伝えられている。この開山泰澄大師とは、越前の出身で、善元年（702）に鎮護国家法師に勅任されている。辰の方角に京都の人々の厄除けで有名な立木観音がある。この寺は弘法大師の修行寺である。

◇第十三番石山寺（大津市石山寺）

名のとおり珪灰石大理石の露出した山である。天平勝宝元年（749）に東大寺大仏鑄造のことが行なわれたが、鍍金する金が足りないため、良弁僧正が石山に小庵を結び祈ったという。亥の方角に茶臼山古墳（大津市膳所町、近江地方第2の規模）がある。同寺はこの古墳を巳の方角の磐座にしたと推測される。

◇第十四番三井寺（大津市園城寺町）

天智・弘文・天武三帝の勅願によって、天武15年（687）に建立したと伝えられている。観音堂は三井寺伽藍の南の高台にある。この堂の真北に弘文天皇陵があり、その先に、大津京との説のある南滋賀廃寺

がある。

◇第十五番観音寺（京都市東山区今熊野泉涌寺）

弘仁10年（819）嵯峨天皇の勅願によって、弘法大師が建立したと伝えられる。平安時代には、賀茂川の東の東の東、鳥辺野は死者を葬る場所とされていたが、この付近も同地域に入ると思われる。

◇第十六番清水寺（京都市東山区清水）

この寺の草創は奈良時代宝龜11年（780）にさかのぼる。たえまなく清水の涌き出る畔に庵をかまえていた延鎮上人を坂上田村麻呂が訪れ、その教えを受け建立したのが始まりとされている。近年市販される地図がより精密になり、5万分の1から戦後2万5000分の1となり、部分的ではあるが1万分の1の地図が出回るようになったため、調査研究がよりやすくなった。六条山（204m）より亥の方角に清水寺の三重の塔がある（日本の塔の階数はいずれも奇数Ⅱ

陽の数である）。さらに、その線上

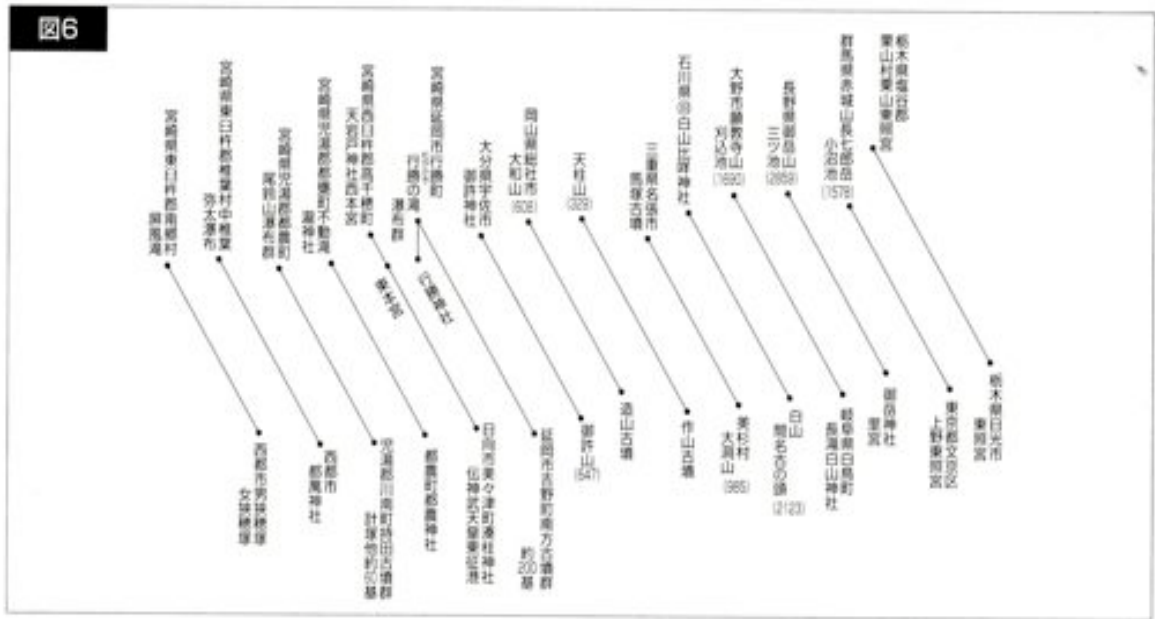
に祇園八坂神社がある。日本三大祭りの一つ、祇園祭りの矛立巡行の矛は奇数（陽）である。その先は、京都御所内の泉洞大宮御所を通り后宮御殿へ至る。清水寺三重塔より辰の方角には清水山（242m）がある。三重の塔より清水山と六条山は巽（辰巳）の恵方に当たる。

このあと第十七番六波羅寺より、第三十三番華厳寺まで続くが割愛する。

おわりに

さて、これまでに実証してきた簡単な明瞭な原理、即ち「乾坤」で説明出来る事柄は、仏教公伝（538）以前、前方後円墳を築造した時代にまでさかのぼる。果たしてその時代に大陸から「乾坤」の思想（道教）が伝わっていたのか。

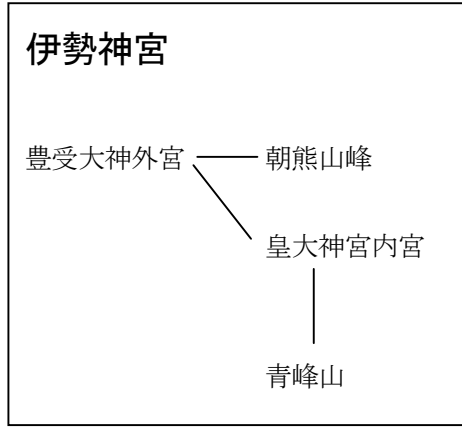
また、巨大な古墳を、易学でいう恵方を意識して築造した技術者集団



は、どのような人々であつたらうか。一つ言えることは、技術者集団の中核となり得たのは、宮家準氏（日本山岳修験学会会長）が指摘する「道教の入山修行に触れたことのある外来の宗教者、もしくは漢易を会得し、またはその影響を受けた修験者」ではなかつたか。道教の思想に精通する彼らが、その根本原理ともいえる「乾坤」の原則を、その最も聖なる古墳や神社・寺院といった人工物と、磐座や山頂・滝・峠といった自然の聖地との“接点”に適用したので。

最後に、記述出来なかつた個所を、図（図6）をもって表わし参考にした。

例証



伊勢神宮「国史大辞典より」

三重県伊勢市に鎮座。古くは伊勢大神宮・大神宮または二所大神宮といつたが、現在では神宮を正式名称とし、一般に伊勢神宮・お伊勢さまなどと呼んでいる。天照坐皇大神を祭る皇大神宮と豊受大神を祭る豊受大神宮からなり、前者はまた天照皇大神宮・天照大神宮・伊須受（イヌズ）宮・渡遇（ワタライ）宮ともいわれ、普通は内宮と称し、後者を外宮といってきた。また、平安時代

末期以来大神宮を太神宮と書く慣習であつたが、正式ではない。両宮のそれぞれに所属の多くの宮社がある。すなわち正宮に対して別宮があり、内宮に10カ所、外宮に4カ所。そのほかに内宮には撰社33社、末社16社あり、外宮にも撰社17社、末社8社がある。また、正宮及び別宮に管せられる社があり、これを所管社といい、内宮に30社、またその別宮の滝原宮に3社、伊雑宮に5社あり、さらに外宮にも4社がある。それぞれ由緒があり、年中恒例の祭祀が行われる。『紀』崇神天皇6年条によると、もと宮中殿内に祭つてあつたのを、畏れ多いとして皇女豊鍬入姫命に託して大和の笠縫邑に磯城神離（シキノヒモロギ）を立てて祭り、さらに垂仁天皇25年3月条には改めて皇女倭姫命に託し、鎮祭すべきところを求めて近江・美濃を巡り伊勢に至り、神教に従つて五十鈴川上に斎宵を立て祭つたのが、現在伊勢市の宇治にあつて伊勢神宮の内でも中心をなす皇大神宮、すなわち内宮の起源である。外宮はまた豊受宮・度会宮ともいって、伊勢市の

山田にあつて五穀の神である。

豊受大神外宮・皇大神宮内宮

〔国史大辞典より〕

すでに延暦23年(804)の兩儀式帳にしめすところは、現在と同様で、簡素にして雄大な建築である。神明造と称し茅葺き屋根掘立柱で、本来はきわめて素朴なもの、毎年造替するほどのものであつたか。しかし、神宮の記録によれば、天武天皇の時には、20年ごとに造替する式の制が定められ、造営の規模も大きくなり、大陸文化の影響も烈しく、変化も大きかった。構造は茅葺きで切妻の白木造、屋上には原始的構造の名残りをとどめて千木・堅魚木がある。その千木は、内宮は内削ぎといつて先端を水平に切り、外宮では外削ぎといつて垂直に切る。堅魚木も内宮が10本であるのに対して、外宮は9本である。高欄の玉も内宮の33個に対して31個となつている。これらの相違については、陰陽五行の考で神秘的説明が付会されてきた。宝殿は東西二殿であり、現在は内宮では正殿の後の東西に並び、外宮では正殿の前の東西に並ぶ。そ

の位置は歴史的にも変遷があるが、建築は蒸籠造で、おそらく正殿よりも古い形であろう。

朝熊山(アサヤマ)〔国史大辞典より〕

三重県伊勢市の東部、伊勢・志摩の国境に立つ標高553mの霊山。里宮の伊勢神宮に対する山宮として古くから崇敬され、「伊勢へ参らば朝熊をかけよ、朝熊かけねば片参り」と歌われ、中世以降の参宮道者は必ず朝熊山へも登拝し、いわゆる片参宮を避けるのが慣例であつた。また、山麓の周辺村落には、人の死後その靈魂がタケ(高くて大きい山のこと)の朝熊山へのぼり山中に鎮留するといふ信仰があつた。そこで人々は、埋葬の翌日あるいは七七忌などに、このタケに登つて死霊を供養するタケ参りを行う。その参拝道をタケミチといひ、道案内の道標が古さを物語っている。こうした山中他界観の民間信仰を基盤として、頂上に金剛証寺が創建された。開基を弘法大師とするのは密教修験の付会であるが、承安3年(1173)の埋経筒の発掘は、霊山信仰の実修を証明したと

いえよう。その奥の院には、信者の安置するタケ参りの石塔がこけむし、木の香り新たな卒塔婆が無数に林立し、朝熊信仰の深さを示している。

を改築した時の勤進文が残る。当寺は「あおのみねさん」と呼ばれ、古来鳥羽・志摩地方の漁業に携る人々の信仰を集めていて、旧正月18日の船祭り、毎月18日の縁日と初午・二の午の日の厄除は多くの参詣者でにぎわう。寺内に「灯明岩」といふ高さ15m・周囲30mの巨岩があり、昔每晚護摩を焚いて海上の安全を祈願した跡。今でも嵐の時、光を放つと伝えられる。また、江戸期建築の仁王門・本堂・鐘楼など17の建造物が軒を連ね、志摩地方随一の巨刹である。

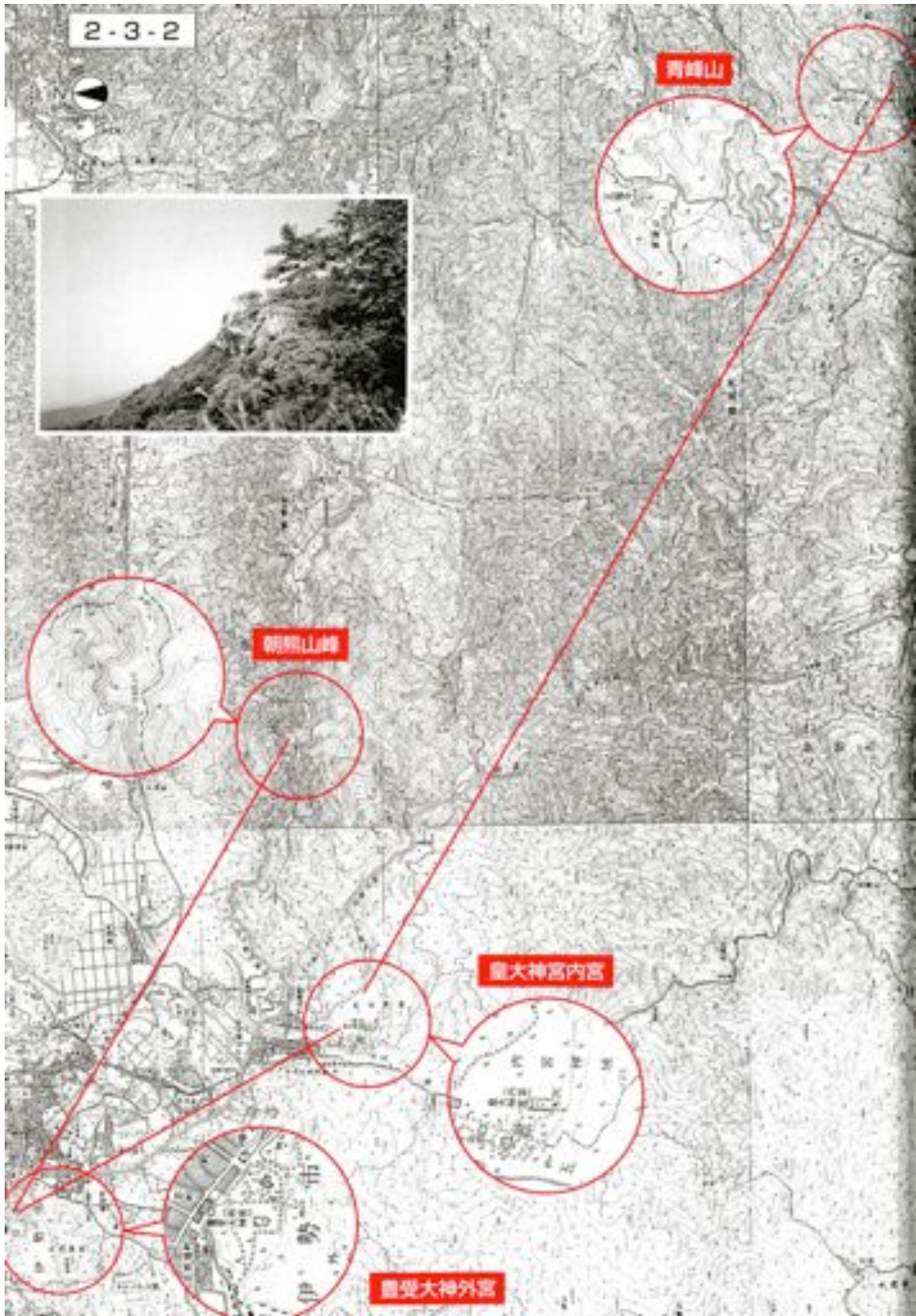
青峰山〔角川地名大辞典より〕
三重県鳥羽市松尾町、志摩郡磯部町の境にある。高さ336.3m。志摩半島第一の高峰で、航海者のよい目標となつていた。この青峰山の南側に、海上安全・航海の守護神として、広い信仰を集めている青峰山正福寺がある。

正福寺は鳥羽市松尾町にある寺。高野山真言宗。山号は青峰山。本尊は十一面観世音菩薩。天保6年(1835)の「志州天朗峰山正福寺縁起」(『志摩の民俗』下)によれば、当寺は垂仁天皇の皇女倭姫命が天照大神をはじめ鎮座したといふ霊峰天朗峰(アオノミネ)山に、行基が聖武天皇の勅命を受け開創した寺で、本尊は鯨に乗つて海中より出現したものと伝える。創建後の寺歴は未詳であるが、戦国期永正5年(1509)鑄造の鰐口には願主である清閑といふ僧の名が刻まれており、江戸初期の正保4年(1647)に当寺

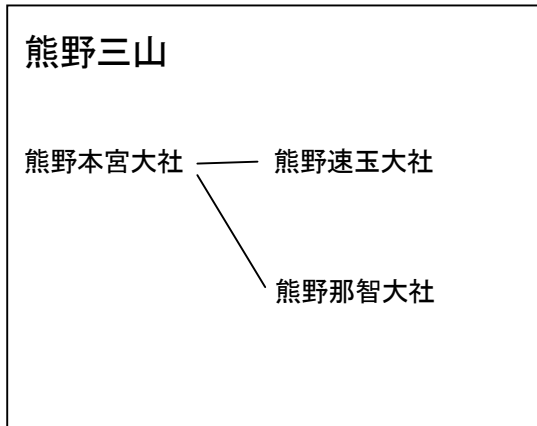
〔私見〕

青峰山の峰に海上より見える巨岩、それに向かつて伊勢地方のアワビ等をとる海女は「九字(クジ)」を切り、身の安全を祈っている。これは、古来より代々伝わってきた海女の習慣である。「九字」とは、修験の世界、道教のまじないである。

伊勢市の豊受大神外宮の位置と、葛城山山頂の位置とが、北緯34度29分24秒、同じ東西の線上にある。意味のないことかも知れないが付記しておく。



例証



熊野三山 「国史大辞典より」

紀伊国の東南部、東・西・南の牟婁三郡にわたる地域は往古の熊野国であるが、そこに熊野本宮大社（熊野坐神社・本宮）、熊野速玉大社（熊野速玉神社・新宮）、熊野那智大社（熊野大須美神社・那智）の三大社が鎮座している。

これらを総称して、熊野三山または三所と呼ぶ。熊野三（サン・ミツ）之山・熊野三御山・熊野みかさねの山・熊野三所（権現）・熊野（クマノ・ユヤ）権現・三熊野・み熊野の宮・熊野十二所権現・熊野十三所権現・日本第一大霊権現などともいう。それぞれ独立した別個の自治体であったが、地域を同じくするところから、やがて祭神をも共通するに至り、一種の宗教的連合体を形成するようになった。

本宮は『為房卿記』永保元年（1081）10月5日条に「三所の御殿」とみえ、すでに本来の家津王子（証誠殿）・結（牟須美神）のこ神のほか、新宮の祭神速玉神を合祀していたことが知られる。新宮・那

智の両山は、『中右記』天仁2年（1109）10月26日条によると、

いづれも三所の祭神を奉斎しているから、すでに本宮より二所の祭神を迎えて、三所の制に改められていたものとおもわれる。しかして『中右記』の同年の条や、降って『長秋記』長承3年（1134）2月1日条をみると三山ともに、はやくも証誠殿・結宮・早（速）玉明神（以上を三所権現といい、三山の主斎神である）、若宮王子・禪師宮・聖宮・児宮（チゴノミヤ）・子守宮（以上を五所王子という）、一万眷属（ケンゾク・従者）十萬金剛童子・勸請十五所・飛行夜叉・米持金剛童子（以上を四所宮という）の、合わせて十二所の組織を具足（所持）していたことが知られる。

なお、那智は、もと那智滝という霊瀑の信仰から起こったもので、その地主滝宮（飛滝権現・飛滝神社）を合わせて十三所権現ともいうことがある。

熊野本宮大社 「熊野三山協議会

「熊野本宮大社の御由緒」より」

熊野本宮大社は、第11代崇神天皇の65年には社殿が創建されている。主祭神は、家津美御子大神（ケ

ツミミコノオオカミ・素盞鳴尊（スサノオノミコト）で、海原を治められた後、出雲の敗（ヒ）の川上流にお降りになり、国土の経営に当たられるとともに、速く大陸をも治められたと伝えられ、『紀伊統風土記』には「大神御身の御毛を抜きて、種々（クサグサ）の木を生じ給い、その八十木種（ヤソキダネ）の播生（ウマ）れる山を熊野とも木野（キノ）とも伝えるより、熊野奇霊御木野命（クマノクシミケヌノミコト）と称へ奉るべし」と記されている。

このことから、紀の国（紀州）の名の起りは、木の国から転じたものとされている。また、大神の御神徳は、天照大神との御誓約を違えずお果たしになったことに由来し、「誓約（チカイ）の神」として、また、正邪を正す神として崇められ、特に、浄土信仰との融合を榮たした中世以降は、熊野大権現、舟玉大明神と称えられて、国土の開発経輪・救霊誓約・殖産興業・交通・造船・大漁、

夫婦和合等の守護神として、また、長寿の神として、皇室および国家の殊遇を蒙り、第59代宇多法皇の御参詣に始まる歴代上皇女院の「熊野御幸」が100度に及んだのをはじめ、万民に広く尊ばれ、今なお日本一根本大靈験所と更に甦りの地として崇められている。

熊野本宮旧社地大斎原「熊野本宮町資料より」

太古より熊野牟婁郡音無里（本宮町本宮）、ここ大斎原（オオユノハラ）に鎮まり、第10代崇神天皇の御代に至り、社殿が創建されたところ。史上有名な中世における「熊野御幸」は当聖地で、宇多上皇より龜山上皇に至るまで、歴代上皇、法皇、女院の行幸啓は百数十度に及び、奈良朝のころより本地垂迹説が行われ、仏教をとり入れ、御祭神に仏徳を仰ぎ奉り、「熊野三所権現、又熊野十二社権現」とうたわれて隆盛を極め、その後も公卿、武門、一般庶民に至るまで朝野の参詣絶ゆることなく繁栄を続け、時宗の開祖一遍上人もこ

こ証誠（シヨウジョウ）殿にて熊野神勅を授かり成道したと伝えられている。時宗歴代の上人（今日まで73代）は、宗門を継ぐ際は必ず当大社に参拝奉告、時宗護法の神と崇めて今日に及んでいる。

不幸にして明治22年（1889）の大水害にて八神殿は倒壊、石祠にお祀り申し上げ、主神の四神殿を、ここより上流700mの高台にお遷し申し上げ、今日に至っている。

熊野速玉大社「熊野三山協議会「熊野速玉大社の御由緒」より」

熊野速玉大社は、景行天皇58年に熊野三所権現降臨の元宮「神倉山」から、現社地に新たに宮殿を造って御遷宮したことから、旧鎮座地の神倉神社に対して「新宮」と号し、御祭神は、熊野速玉男命・熊野夫須美命を主神に十二社の、神々を祀りあげ、古来から新宮十二社大権現として朝野の崇敬を集めてきた。特に孝謙天皇の御世、日本第一大靈験所の勅額（直筆の額）を賜り、熊野権現信仰は熊野比久や熊野比久尼によつ

て、一躍国家挙げての信仰に発展していった。

境内には、熊野権現の象徴たる樹齢約千年の「椰（ナギ）」の大樹がそびえ、御神木として崇められ、また歴代の朝廷から賜った1200点にもおよぶ古神宝は、質量ともにわが国屈指の社宝として悉く国宝の指定を受け、熊野神宝館において展示している。

ごとびき岩 「和歌山県教育委員会・新宮市教育委員会資料より」

和歌山県指定文化財史跡神倉山（新宮市）の山上には、通称「ごとびき岩」といわれている数個の巨岩があり、御神体として崇められている。古代から長く熊野の祭礼場として神聖視されてきた霊山である。急斜面に自然右を積み重ねた石段がつけられている。

2月6日夜の例祭、お灯祭りは、古儀の特殊神事として名高い。白装常に身を固めた祈願者が神火を松明にうけて、急坂（源頼朝公御寄進の鎌倉式石段）を駆け下る壮観な火祭。指定文化財。

熊野那智大社 「熊野三山協議会「熊野那智大社の御由緒」より」

熊野那智大社社伝によると、「神武天皇が熊野灘から那智の海岸「にしきうら」に上陸されたとき、那智の山に光が輝くのを見て、この大滝をさぐり当てられ、神として祀られ、その守護のもとに、八咫鳥（ヤタガラス）の導きによって無事大和へ入られた」と記されている。このように熊野那智大社の根源は、那智大滝を神としてあがめたことにあるが、その社殿をお滝本から現在の社地に移したのは仁徳天皇5年（317）と伝えられている。時代を経てその後、平家物語にも出てくるように、平重盛が造営奉行となつて装いを改め、やがて織田信長の焼打ちに遭つたのを豊臣秀吉が再興し、徳川時代に入つてからは、將軍吉宗公の尽力で享保（1716）の大改修が行われたとされ、最近では昭和10年（1935）に大改修が行なわれ今日に至っている。

春になると社前の枝垂桜が花を添え、この桜は、最初は後白河法皇がお手植えされたものといわれ、室町

時代の図絵にも画かれている。また、この樹の側には、神武天皇が大和に入られる際道案内をした八咫鳥が、その任を終えこの石に姿を化したと言いつた「烏石」がある。なお、平重盛の手植えと伝えられる樹令800年余の大楠（県指定天然記念物）などもある。

社殿は6棟13殿よりなり、それぞれの御殿は名称をもち神々を祀り熊野那智大社と称し、熊野権現、あるいは十二所権現と称し、お滝の神を含め十三所権現と呼ばれている。その由縁の神仏習合時代に神々と一体として祀られていた本地仏の名も掲げられている。

第一殿は滝宮殿で大日貴命（オオナムチノミコト）、第二殿は家津御子神（ケツミコノカミ）、第三殿は熊野速玉神。第四殿は熊野大須美神（フスミノカミ）。第五殿は天照大神が祀られているが、第四殿熊野夫須美大神が当社の御主神で、むすびの神、万物の生成、育成、すなわち生産和合の守護神として多くの人々に崇拝されている。

また、例年7月14日那智の火祭

（扇筥が盛大にとり行われている。

那智青岸渡寺「熊野三山協議会

「那智山青岸渡寺の御由緒」より

「補陀洛（フダラク）や岸打つ波は三熊野の那智のお山にひびく滝つ瀬」と御詠歌で親しまれている西国第一番の札所である。当山の縁起によると、その開基は仁徳帝の頃（4世紀）。印度天竺の僧、裸形（ラギヨウ）上人が那智大滝において修行を積み、その暁に滝壺で24cmの観音菩薩を感得し、ここに草庵を営んで安置したのが最初である。

その後、200年推古天皇の頃、大和の生上人が来山し、前述の話を聞き一丈（4m）の如意輪観世音を彫み、裸形上人が感得した24cmの観音菩薩を胸佛に納め、勅願所として正式に本堂が建立された。

平安朝中期から鎌倉時代は、「蟻の熊野詣」といわれ、熊野三山の信仰が盛んになり、この時、65代花山法皇が3年間山中に参籠され、那智山を一番にして近畿各地の三十三観音様を巡拝されたことよって、西国第一番札所となった。

現在の本堂は、織田信長南征の兵火にかかり、天正18年（1590）豊臣秀吉によって再建され、桃山時代の建築をとどめ、南紀唯一の古い国指定の重要文化財建造物で、この堂の高さは大滝の落口の高さと同じであるといわれている。

青岸渡寺尊勝院は、那智山開山の裸形上人像と如来像を安置。中世以降は天皇、皇族の熊野詣での宿泊所にあてられていた。不開門は同院の入口にある唐破風（カラハフ）の四脚門で有名。なお、大正7年（1918）に那智の滝参道口・沽池と呼ばれるところから発掘された、飛鳥・白鳳時代から鎌倉時代初期にかけての熊野信仰を知る貴重な那智経塚出土品のうち、白鳳、奈良時代の観音菩薩立像、また藤原時代後期の金剛界三昧耶形（曼荼羅を立体的に表現）が国指定重文になっている。境内からは那智の滝、那智原始林、太平洋の眺めもよく南北朝時代の重文・宝篋印塔（4.3m）や梵鐘がある。

「私見」

2・4・4図で、熊野速玉大社から西北西の線上と熊野那智大社から北北西の線上との交点に注目して欲しい。そこは現在の熊野本宮大社ではないが、旧社地の大斎原に当たる。つまり本宮から辰の方角に速玉大社が、巳の方角に那智大社が位置したのがある。

